

論文

「クルアーン」が教える人間洞察（第4回）

アフマド鈴木絃司

地域文化学会理事、マレーシア現地法人役員

（本論に掲載したクルアーンの日本語訳は著者の翻訳による。）

第111章：棕櫚 = 親族同士の争いを戒める警告です。

マッカ初期のクルアーン章の特徴が段々と登場してきます。恐ろしい地獄や最後の審判についての警告が迫りに満ちた描写で展開します。本章はムハンマドの親族ながら布教を邪魔して激しく敵対した伯父の「アブドル・ウザー・アブドル・ムッタリブ」に関する啓示です。ハーシム家の集まりでは時にムハンマドを殴ろうとし、後を付け回しては邪魔を入れ、暴言をはいて嘘呼ばわりを繰り返しました。「赤ら顔」のため綽名が「アブー・ラハブ（炎の父の意）」と呼ばれましたが、その綽名の通りに地獄の炎に焼かれるという内容です。

その最期はバドル戦の大敗北を聞き、怒りの感情を下僕にぶつけて虐待したことで、怒った女性が彼の頭を叩き割り7日後に亡くなりました。

1. 滅ぶがよい、アブー・ラハブの両手。そして、滅ぶ。
2. その金銭も、得たものも、彼のために役立たない。
3. やがて、焼かれよう、炎を上げる業火で。
4. そして、彼の妻は薪の担い手。
5. 彼女の首に、棕櫚の荒縄つけて。（第111章、1～5節）

（1節）冒頭が呪いの句から始まる数少ない章の一つです。最初の「滅ぶ」は願いを表し、後の「滅びる」が断言を意味し、御主が必ず滅ぼすという強調です。両手とあるのは、身体の一部で全体を代表させる修辞表現で「全身」を示します。

（2節）復活の日には、彼が集めた金銭も財産も子供も何の役に立たず無益となります。

（3節）預言者に反対し邪魔した罪で罰され、死後は地獄に落ちて燃える炎でじっくり焼かれるのです。

（4節）彼の妻ウナム・ジャミールも地獄に入り、棘のある薪を運ぶ役目をやらされます。彼女は誹謗や中傷に長けムハンマドへの反対を煽動して敵対心は夫に劣りませんでした。彼女は、預言者と最後まで争ったマッカの実力者、ウマイヤ家長アブー・スフヤーンの実妹でした。「棕櫚(マサド)」には、①椰子の繊維、②火の鎖、③水汲み用の綱、との注釈があり、それらで編んだ荒縄で巻き付けられるのです。呪詛の文言でしかも個人名を挙げた本章の激しさは他に類を見ない特別なものです。通常は普遍的な内容をもつ啓示の中でムハンマドの個人感情が反映した章とも見えますが、「炎(ラハブ)」の単語を使い、地獄を想起させた修辞法との注釈です。また本章は強い警告文となっており、家族、親族の近親内での争いを厳しく諫める内容です。これに反して近親内で流血事態を起こすような者は、

現世と来世の双方で罰されるというのです。

近年の中東では、ユダヤ教徒の国家イスラエルと周辺アラブ諸国との間で、第4次迄の中東戦争が主流ですが、その他にもイラン・イラク戦争やイエメン戦争など、ムスリム国同士の本格的な戦争が起きており、これこそが本章で禁じる信徒同士による流血です。

1980年から8年間続いた「イラン・イラク戦争」は、アラブの盟主となる野心に燃えたイラクのサッダーム・フサイン大統領が仕掛けた戦争であり、同じく1990年の「クウェート侵攻」により湾岸戦争、そして、米軍のイラク侵攻へと連続した訳です。ムスリム国同士の紛争は2015年から現在まで続く、サウディアラビア主導の「イエメン紛争」が典型で、本章の解釈からムスリム国同士の戦いは許されません。特に現在は、原油輸出大国のサウディ王家内部の権力争いの情報が洩れ伝えられるだけに、その結末が今後の注目点と言えましょう。なお王室内部の争いに女性がいかに拘っているかは、王宮の厚いカーテンに覆われて伺い知ることはできません。

第81章：被覆（全29節）＝ 地球の終末における光景の描写です。

復活の日の恐ろしい光景が展開して、輝く太陽がターバンでぐるぐると何重にも巻かれ、完全に光りを失います。世界が暗黒に覆われて消滅していく恐怖の風景です。伝承、預言者は申された。「誰でも復活の日を眼前に眺めたいと望む人は、第81章、第82章、第84章を読むがよい。」

本章の始まりは、条件助詞で、「～のとき」という条件文で、この形式で始まる章は他にも計7章あります。

1. 太陽が覆われるとき、
2. 星々が散らされるとき、
3. 山々が動かされるとき、
4. 十ヶ月目の母親ラクダが放置されるとき、
5. 野獣が集められるとき、
6. 海洋が煮えこぼれるとき、
7. すべての魂が結合されるとき、
8. 生き埋めの女兒が訊かれるとき、
9. どんな罪で殺されたのかと、
10. 帳簿が開かれるとき、
11. 天空が剥がされるとき、
12. 地獄が燃えさかるとき、
13. 楽園が近づき来るとき、
14. 魂は為してきたことを知る。

天空の星々は落ちて砕け散り、形状を失い、光りが消滅して混沌が拡がります。堅固な山岳すら揺れ動いて滑り出し、砂丘のように脆くなり、羊毛のように浮いて砂塵となります。4節の「十ヶ月目の母親ラクダ」では、アラブで最も大切な財産とされる子を孕んで10ヶ月目の母ラクダですら誰も見向きせず放置されます。山野の猛獣が集められて出現し、塵や埃に化します。海洋が噴火で煮えたぎり溢れ出て、海と山が一つに重なります。この6節までが復活の日の光景であり、7節以降はその後に起きることです。

人間の魂は、過去の肉体と組み合わせられて結合します。これが「よみがえり=復活」で最初に起きます。8節の「生き埋めの女兒」とは、無明時代に飢饉や貧困の理由から口減らしのため土中に埋められた女兒のことで、何の罪もないのに何故殺されたと泣いて訊ねます。関連の伝承「ハディース」によれば、神はムハンマドに次のように「使徒よ。誰が天国の住人ですかと訊かれたとき、預言者たちは天国に、殉教者は天国に、赤子も天国に、そして生きて埋められた女兒も天国に住む」答えられた。

10節は天使たちが書き留めた各人の現世での行動記録が善悪の審判のために開かれます。

そこで天国へ行く人々と地獄に落とされる者とは、右と左に分けられます。天空が裂け割れ、羊の皮が剥ぎ取られるような状態となり、地獄の業火が激しく燃え、その燃料は人間と石なのです。天国の樂園が信徒たちのために直ぐ近くまで接近してきます。そして、全ての人間が現世での善悪行為を、その行動記録によって知るという応答文が14節です。

その後も宣誓の言葉が並んで、啓示が貴い使徒の言葉であることを強調します。

7世紀の人々の想像力と21世紀、現代人のイメージの比較ですが、現在では映像技術が進歩して毒々しい恐怖の画面が豊富なため、上記の文章だけでは説得力が弱いかもしれません。しかし、大宇宙の一つの星に過ぎない地球上に人間が生まれ、生きて生涯を終えるという厳然とした事実は古今、まったく変わっていません。これをどう受け止めて人生を送るかは、何時の時代にも、重要な問題であり続けます。

第87章：至高の主（全19節）＝創造主について易しく説明します。

完全無欠で何も必要としない「至高（アアラー）」の「御主（ラッブ）」の御名を讃美せよ、という指示です。唯一神の讃美から始まる章の一形式である「讃える」の動詞命令形で始まります。「唯一神（アッラー）」はいかなる形象にも表せませんが観念の中で最高の位置にあります。

1. 讃えなさい、至高の主である、汝の御主の御名を。
2. 御方は創造され、次いで整え給うた。
3. そして御方は運命を定め、次いで導き給うた。
4. そして御方は牧草を萌え出し給うた。
5. 次いで黒い枯草にそれをなし給うた。
6. 汝に我は読誦しよう。それで汝は忘れない。

7. アッラーが望み給うことを除いて、まことに主は明白なものと隠れたことを知り給う。
8. そして汝へ、我は汝に道を容易にして、た易くする。
9. だから論すがよい、そのお諭しが役立つように。

(1節) は命令文であり、最高の存在である創造主の御名を讃えて念じなさいとあります。

(2節) 以降が主の御業の説明です。まず、万物を創造して形状を整えました。人間には身体の各部分を合わせ、完全な組織体としました。

(3節) 各々の被造物に、その寿命、種類、形状、行動様式などを細かく定めて進みゆく方向を決めました。

(4節) 動物の飼料には牧草を芽吹き出させ、人間には様々な穀物、野菜などを与えました。

(5節) 最後には、それらの植物を枯れさせます。これは、生あるものに必ず死が訪れることを象徴する表現という注釈です。

(6節) ムハンマドには天使の言葉をゆっくり読ませ、忘れないように記憶させます。

御主の意図により、或る部分を忘れさせ取消すこともあります。それは例外で通常は忘れないように保持されました。

(7節) 御主アッラーは全てをご存知で、何の隠し立もできません。

(8節) つねに善い言動を行うように、それも難しくなく容易に行えるように指導します。

(9節) それゆえに、人々を諭して正しい道へ導きなさいという預言者への語り掛けです。預言者がマディーナへ移ったときに人々は喜び集い、本章を皆で朗読したと伝えられます。

10. やがて主を畏れる人が心に留めよう。
11. だがそれを邪悪な者は避ける。
12. この者はその巨大な業火へ入る。
13. それからその中で死なないし、また生きもしない。
14. たしかに身を清めた人は成功する。
15. さらに御主の御名を念じる、そして礼拝する。
16. しかし現世の生活をあなた方は好む。
17. だが来世はより素晴らしく、そしてより永続する。
18. 本当にこのことはその昔の啓典の中にある。
19. イブラヒーム (アブラハム) とムーサ (モーセ) の書に。

(10節) 以下は、御主を認知する必要性を説き、現世と来世を比較して、永遠の世界へ直結する来世を、肯定的に捉える考え方を教えます。その結論として証拠となる基本が、アブラハムの絶対唯一神信仰の宗旨、並びに、モーセ五書であるという解説です。

この章を読んで思い出したのが、子供の頃に日本の田舎道で出会った腰の曲がったお婆さんのことでした。お年寄りが重い野菜籠を背負いながらゆっくり歩いていました。「お婆ちゃん、大変だね、疲れしないの」と声を掛けたときの返事をはっきりと覚えています。「坊や。毎日こう働いているのも神様のおかげだよ。そのうちお墓に入ったらゆっくりと休めるからね」。

来世でゆっくり休めることを彼女はどこから学んだのでしょうか。

第92章：夜（全21節）＝ 二極対立の修辞法で説明しています。

1. 夜が覆い隠すときにかけて、
2. 昼が輝き表すときにかけて、
3. 雄と雌を創造された御方にかけて、
4. 本当にあなた方の行為はまったく多様である。
5. それで誰でも施しを与え、また主を畏れ、
6. またその最善を信じると、
7. やがて善い道を彼にた易くさせよう。
8. そして誰でも物惜しみに また利己本位で、
9. またその最善を嘘とすると、
10. やがて苦難の道を彼にた易くしよう。
11. それで彼にはその財産が破滅するときに役立たない。

（1節）から（3節）までが宣誓文となっています。夜の暗闇がすべてを覆い隠す時間と、日光が事物を明白にする昼にかけて誓います。人類の祖アダムとイブの男女を創り、動物、植物のあらゆる種類を雄雌に創造した御主に誓うのです。そして誓いの応答文となります。

（4節）人々の行為というのは、色々と異なり千種万別であるという事実の確認です。人間は2種類に分類できて、御主アッラーを崇拝する態度に正反対な動きを見せます。

（5節）自分の財産を善行に使い他人のため施しをするのが主を畏れる人であり、その人は最善の努力に励んで、御主が禁じたことを避け、御主との約束を守ります。「最善」とは、①善い行動、②唯一神信仰（タウヒード）の証言、③礼拝、喜捨、断食などです。それに報いて御主は安らぎの心を与え、正しい楽園に至る道を容易に導き、現世と来世で直面する困難を容易にします。

（8節）反対に物惜しみをして自分本位な人間が多くいます。そうした者たちには御主が苦難の道を設けるので、地獄に落ちる時にはそんな財産など何の役にも立ちません。

クルアーンでは、夜と昼、雄と雌、善と悪、という二極対立の例をよく挙げます。修辞上の効果を際立たせて理解を容易にさせる手法ですが、その二極を線引きする境界の説明があることも特徴の一つです。夜と昼の境界では、夜の始まりは太陽の姿が地平線に沈んだ「日没」であり、昼の始まりが白糸と黒糸の差が判別できる時刻「黎明」です。

現代社会では、男女の区別について「LGBT」の問題が提起されていますが、人間の「男女」の判別は、イスラーム法で古くから検討されてきました。

第89章：黎明（全30節）＝ 宣誓文でより強く訴えます。

1. 黎明にかけて、
2. 十夜にかけて、
3. 偶数と奇数にかけて、
4. 更けゆく時の夜にかけて、
5. これらの中に知性の持ち主のため、誓いがあるではないか。

宣誓文が並びます。誓言とは特別な定型をとる「誓いの言葉：カサム）」で人間が唯一神アッラーに対して誓うことであり、人々へ信念を植え付ける表現形式です。クルアーンでは唯一神の創造の「神兆、徴（アーヤ）」「である大自然の事象を選んで誓う定型を取るのが一般的であり、計15章の始まりがこの形となっています。

（1節）「黎明」とは、朝の光が夜の闇を破る頃で、この時刻から人間や動物の活動が始まります。他の注釈では、①早朝の礼拝、②巡礼月10日目の朝、を意味するとあります。

（2節）「十夜」とは、H（ヒジュラ）暦12月（巡礼月）の最初の10日間の夜をさし、この特定日は善行に励むことを勧めます。他の解釈では、

- ① H暦1月（ムハッラム月）最初の10日間、
- ② H暦9月（ラマダーン＝断食月）の10日間を指すとあります。

（3節）「偶数と奇数」の解釈も多くあり

- ① 数字：全ての整数はこのいずれかに属すること。
- ② 絶対神だけが唯一の奇数であり、被造物はすべて偶数であること。
- ③ 巡礼月で特定の日（10日の犠牲献上日）とアラファートの日（9日、悔悟の日）を指す。
あるいは、巡礼行事でミナ谷滞在の日数（タシュリーク）が2日間或いは3日間のこと。
- ④ 1日5回の義務礼拝の節の数を指し、日没礼拝が3回の奇数で、残りすべてが偶数回（早朝：2回、正午：4回、午後4回、夜：4回）などです。

（4節）「更けゆく夜」とは、心を安らかにして静かに休息が取れる夜間を意味します。

（5節）こうした誓いの文中に知性の持ち主のため理解力を増す象徴を含んでいると解説があり、人間にとり最も必要な知性を磨くことを強調しています。

（6節）以下は、昔の民、アード族、サムード族、ファラオ達はその国で強権を揮い、横暴を極めたが天罰を下されたとの史実を述べて、現世で行う行為が肝要であること、人間というのは御主からの恩典に感謝せず、自分の利益しか考えず、軽薄な見方で来世を思わずに誤った行動に走りがちであること、財産と金を溺愛して現世を優先し、来世のための努力をしないと叙述があります。復活の日には大地が大揺れに揺れて、粉々に崩れ散り、すべての建物が崩れ落ち、御主が来臨して審判が行われ、天国か、地獄行きが決定されると述べています。

第93章：朝（全11節）、第94章：拡張（全8節）＝人間愛こそが基本です。

本章は、御主、神が預言者ムハンマドを慰め、その生涯に関して語る章として有名です。

1. 朝にかけて、
2. 夜が更けるときに掛けて、
3. 汝の御主は汝を見放さず、また嫌っていない。

4. そして来世こそが汝にとり現世より良い。
5. そしてやがて汝の御主が汝へ与え給う。それで汝は満足する。
6. 孤児の汝を見出し、それで保護をしなかったか。
7. さ迷う汝を見出し、それで導いた。
8. そして貧しい汝を見出し、それで裕福にした。
9. だから孤児には無理強いはいけない。
10. そして物乞いを追い払うのはいけない。
11. それで汝の御主の恩恵につき語るがよい。(第9章、1～11節)

(1、2節) 朝と夜の対比を挙げた誓言は、預言者の出現を象徴すると解釈されています。

(3節) 預言者ムハンマドに天使ジブリールからの啓示がしばし途絶えたとき、不信者らが揶揄したのに応えての啓示とされます。御主アッラーはムハンマドを見放し、嫌うようなことは絶対にあり得ないとの確認です。

(4節) 今よりも将来の方が良くなる、また現世の栄誉より来世の方が遥かに素晴らしいと強調します。ムハンマドにはその約束が必ず果たされるという励ましでもあります。

(5節) 実際にこれまで様々な恩典をムハンマドは与えられてきました。

(6節) 誕生前に父を亡くし、6才で母親を失った孤児ムハンマドを祖父や伯父が保護し続けてきました。

(7節) 「迷い」につき注釈があり、通常の迷いは「導き」の反対語として「不信」を意味する場合があります。預言者にはあり得ないことです。本節の「迷い」の意味はムハンマドが啓示にまだ接してなく、信仰の知識を知らなかった頃と解釈します。

(8節) 貧しかった孤児の身分は妻ハディースとの結婚で裕福になりました。関連の伝承。「使徒は言った。豊かさとは富の多さではない。豊かさとは心の満足(知足)によるものである。」上記はすべて啓示を受ける前に賦与されました。続いて次の3項目を挙げます。

(9節) 孤児に対しては強制や無理強いせず優しく接し、財産を奪うことを固く禁じる。

(10節) 物乞いの人を拒絶して邪険に追い払ってはいけません。威張らずに対応するのが必要で、これが人間愛なのです。

(11節) 与えられた啓示を通して、御主の素晴らしい恩恵に感謝することを人々へ語るようにとの指示でした。

21世紀の世界を見渡すと、知性と道徳が欠如したまま、虚偽と誇張、宣伝により、不正な金儲けに没頭する人間が増えているように見えます。御主が賦与した財産であることを自覚もせず、自己愛と過剰な自信だけで、公共に不可欠な予算や貧しい人々が必要とする支援金を平気で削減する政治家の態度に辟易することが多いと感じるのではないのでしょうか。

同じく「第9章：拡張(全8節)」も使徒ムハンマドに関する啓示です。

冒頭は確認を求める「疑問文」から始まっています。一説では前章と連続していたとも云われます。

1. 汝のため汝の胸を張り広げなかったか。
2. そして汝から汝の重荷を取り去った。
3. 汝の背中を重くしていたものを。
4. そして汝のため汝の名声を高めた。
5. だが本当に苦しみと共に楽がある。
6. 本当に苦しみと共に楽がある。
7. それで手が空いたときは専念しなさい。
8. そして汝の御主へ願い求めなさい。（第94章、1～8節）

（1節）胸を「張り広げる」の意味や解釈は幾つかあります。①偏狭を取り去り、英知による信仰の導きを与えること。アラブでは胸の広さが寛容、骨の強さが強靱を示します。②夜行旅（イスラー）によって胸が広げられたこと。③ムハンマドが幼児の頃に、天使がムハンマドの胸を切り開いて心臓を洗い清めたとの伝承に基づきます。

（2節）「重荷」とは、使徒自らに課した罪の意識や自省などを指し、それらを除いたことで、使徒の負担が軽減したとの意味です。

（3節）ムハンマドにかかる重圧は一般人と違い、「誤り」が許されません。しかし実際には人間ですから誤りもあります。その例としては、信仰を求めて近づいて来た盲人に対して説教中のムハンマドが眉をひそめて嫌な顔をしたため叱られた第80章があります。また、タブークの戦役の際に、偽善者へ不参加の許可を与えた誤りも指摘されています。

今回のコロナ禍で世界の政治家に課せられた重圧も同様でしょうが、難しい舵取りを要求されたときにこそ、指導者本人の真価が試されます。

（4節）「名声」の意味は、ムハンマドが人類最終の預言者としてクルアーンを受啓したこと、信徒たちが「礼拝呼び出し（アザーン）」「信条証言（シャハーダ）」において、必ずムハンマドの名前を呼び上げることを指します。

（5、6節）「苦しみ」と共に「楽がある」と反復し強調しています。本節は信徒の貧者が迫害を受けた時に啓示されましたが、ここには明らかに肯定的な未来志向が謳われています。

ここには「一寸先が闇」という悲観ではなく、「未来は神が決定する」との強い信仰に裏付けされた基本原則があります。日本の諺は「楽あれば苦あり」と順番が逆であり、「楽をしていると将来は苦勞するよ」との意味です。換言すれば、「今やることをしないと、先々に苦勞するよ」との忠告です。この句は日本人の勤勉性に関連したと解されますが、世界での国民性には様々あり、現在を楽しんで将来の苦勞はその時に解決すると、深刻に悩まず楽観的に暮らす民族も多くいます。それに比べて日本人は楽を避けて、苦勞を選ぶという自虐的で悲観的な傾向が強いように見えます。たしかに「楽は苦の種、苦は楽の種」と相対関係にあり、人生はその間を往復しているので、この順番の再考を要するかもしれません。

（7節）現世の仕事が楽になり、手が空いたならば、創造主の崇拝に専念し、唯一神アッラーにお任せする来世に思いを馳せなさいとの勧告です。

今日の生活は時間に束縛され、物質的なものに囲まれ過ぎ、余裕がない人が増えているように思います。あらためて来世を考える時間を持つ必要があります。

第103章：午後（全3節）；第95章：無花果（全8節）＝人類が迎える終末です。

午後に誓うとの宣誓文から始まるのが「第103章：午後」です。「午後（アスル）」は時間の区切りですがアラビア語では、太陽が傾いて物体の影が本体と同じ長さになる時刻から日没までの間をさします。日暮れが近づくと一日が過ぎ去る「時の流れ」を実感します。時間は人生に様々な変化をもたらしますが、普通の人間は現世の仕事に多忙すぎて真理を見失い、滅びる運命へ進んでいるとの教えです。

1. 午後遅くにかけて。
2. 本当に人間は滅亡の最中にある。
3. 例外はこの人たちで、信じてまた善いことを行う。そして真理を互いに勧め合い、また忍耐を互いに勧め合う。（第103章、1～3節）

人間の滅亡を避けるための対処として4つの事項を以下に挙げています。

- (1) 信じること：創造主、天使、経典、使徒、来世、天命の六信がよく知られています。
- (2) 善行に励むこと：背信を拒否して悪を避け、唯一神が規定する法を守ることです。それには、信仰宣言、礼拝、喜捨、断食、巡礼の5行を実践して、社会生活の規則を遵守することになります。クルアーンがその守るべき道を具体的に示します。
- (3) 真理を勧めること：人々がお互い同士で、何が真理であるかを見極めて、義務行為につとめることです。人々に虚偽を宣伝し、誤った道へ扇動することは許されません。
- (4) 忍耐を勧めること：正しい道を選択し、それに反する迫害には、互いに耐え忍んで反撃の好機を待ちます。天災時は苦しい運命に我慢しながら互いに頑張ることです。

7世紀から時間は経過しましたが、人間は滅亡へ向かって進行中というのは、どうやら事実のようです。現在は科学技術の進歩で生活のレベルは格段に向上しましたが、果たして人間の精神は良い方向へ進展を遂げたのでしょうか。いや、啓示が示す通り、一筋縄ではいかない腹黒い人間が増殖しているのではないのでしょうか。実際のところ、真理を勧め合いなさいとの忠告に反して、現在では「フェイク（偽）・ニュース」が満ち溢れる状況です。それを扇動するのが大国の政治指導者たちなのですから、上記の啓示は正しいと痛感されます。

コロナ禍延の昨今においてこそ「事実確認（ファクト・チェック）」が必要とされ、人々は互いに忍耐を勧め合い、正道を選択し、善行を実践することを迫られているのではないのでしょうか。